第27回可児市消防操法大会

チームワークで成果を発揮

5月25日、可児市役所駐車場で第27回可児市消防操法大会が開催されました。

大会では、想定した火点（的）に向けて放水し、的を倒すまでの所要時間だけでなく、規律や節度、安全性やチームワークなどを各地域の消防団が競い合いました。団員たちは、この大会に向けて約2カ月にわたって訓練を重ねてきており、本番でも声を掛け合いながら機敏な動きを見せていました。

また、会場には団員の家族や一般市民らも訓れ、拍手や声援が飛び交っていました。

大会の様子（上：火点への放水、下：応援する見学者）

操法とは？

消防操法は、消防団員が消火技術の向上と初期消火のため必要な技術を身に付けることを目的として定められました。どんな状況においても、迅速、確実、かつ安全に行動できるように、消防用機械・器具のうち、特に反復訓練の必要なものを選定し、その操作と取り扱いの基本を定めています。さらに、操法を通じ消防人としての心構えを培い、消防活動に必要な「心・技・体」の基本を養うことも目的の一つです。

ポンプ自動車操法とは？

可児市においては、各消防団が主にポンプ自動車（消防車）により、消火活動を行うため、ポンプ自動車操法による大会を行っています。

①出場隊員

5名（指揮者、1番員、2番員、3番員、4番員）

②競技形態

ポンプ車右側放水口から20mホースを3本つなぎ合わせ、ホース1線による放水（第1線延長）を行ったのち、車両左側放水口からさらにホースを3本つなぎ合わせ放水（第2線延長）、計ホース2線にて放水を行います。

③基準時間

標的を倒すまでの基準タイムは第1線が55秒、第2線は65秒

大会に向けた訓練

各団員は、この大会に向けて、4月上旬から夜間の訓練に励んできました。

訓練は、新入団員にとっては、消火活動の基本動作を習得し、安全で確実に作業できるようになるために重要なものです。

毎年この時期、市内では大きな駐車場など、いたるところで訓練が行われています。取材したこの日も、第1分団第1部（広見）の団員が熱のこもった練習をしていました。

操法大会では、県大会が2年に一度あり、市の大会で優勝した部が出場します。広見消防団は昨年度、市で優勝して県大会へ進みました。県大会は通常8月に開催され、出場する団員は夏の暑い時期にさらに練習を積みます。

可児市消防団のポンプ自動車

夜間に行われた訓練（広見消防団）

今年の大会では、競技が始まるころには雨も上がり、選手にとっては涼しいコンディションとなりました。審査の結果、土田消防団が、15年ぶりの優勝を果たしました。優勝旗を手にした土田の団員は、「指導員も含めてチームワークの勝利です」と満面の笑みを浮かべていました。

優勝した土田消防団のメンバー

〈団体の部〉

成績	分団・部名（地区）
優勝	第2分団第4部（土田）
第2位	第1分団第3部（中恵土）
第3位	第3分団第1部（春里北西部）
第4位	第2分団第1部（今渡）
第5位	第2分団第2部（下恵土）
第6位	第4分団第1部（久々利・柿下）

また、団体の順位とは別に、各番員別で成績が最も良い団員には、優秀賞が授与されました。

3番員 奥村高徳さん

3番員 長沼久敏さん

2番員 堀井正広さん

1番員 徳永努さん

指揮者 吉田学さん

4番員 永江陽介さん

〈個人の部〉

	氏名（敬称略）	分団・部名（地区）
指揮者	吉田　学	第3分団第1部（春里北西部）
1番員	徳永　努	第3分団第3部（帷子西部）
2番員	堀井正広	第2分団第4部（土田）
3番員	長沼久敏	第2分団第4部（土田）
3番員	奥村高徳	第3分団第1部（春里北西部）
4番員	永江陽介	第3分団第1部（春里北西部）

各団員の皆さんには、大変お疲れさまでした。そして、訓練で培った基礎技能と消防精神を、今後の消防活動に生かしていただくよう、多くの市民が期待しています。

消防団活動について詳しく知りたい方、入団を希望される方はご連絡ください。

●問合先　防災安全課

広見消防団　清水勉さん

昨年県大会へ1番員として出場した清水さんは、「消防団に入団して貴重な経験ができた。仕事では接点のない同年代の者同士親密な人間関係が生まれ、一生の宝物となった。もっと早く入団すればよかった」と話します。

日本人ブラジル移住100周年

夢を求め、海を渡った日本人

1958年アルゼンチナ丸の前にて

市内のあちらこちらに緑と黄色で彩られたお店や服装を見かけませんか？

この色は、ブラジルの国旗に由来するものですが、市内には多くのブラジル人の皆さんが生活をしています。彼らのほとんどは日系人で、日本からブラジルに渡った皆さんの子孫です。

ブラジルへの移民が始まってから、今年はちょうど百周年を迎えます。今回は、可児市で活躍している日系ブラジル人のルーツについてご紹介します。

1908年6月18日、781人の日本人移住者を乗せた移民船「笠戸丸」がブラジル・サントス港に到着しました。

深刻な経済危機に襲われていた日本から、豊かになれるという夢を抱き、希望に満ちた新天地ブラジルへ、日本人移民の歴史がスタートしました。

戦前戦後を通じてサントス港で下船した日本人移住者は、約23万人。当初その多くは、大農園のコーヒー畑などで契約労働者として働きました。

しかしコーヒー不況などの影響で思うように収入が得られないばかりか、衣食住、労働環境も大変厳しいものがありました。

移民会社の海外興業株式会社がブラジル移住を呼びかけるマッチ箱。

それでも彼らは、「故郷に錦を飾る」という夢を失わず、その気持ちが幾多の困難を乗り越え、前進する力となりました。

そして奥地の開発が始まり、分割で土地が売り出されると、日本人移住者が集まって開拓し「植民地―コロニア」という集団移住地を形成していきました。また農園の契約労働者は少しずつ蓄えた資金で植民地に移り、借地農、自営農へと変化していきました。

夢を壊した戦争、再出発

第二次世界大戦で世界は二つに分かれ、ブラジルでは日本出身の移民は危険分子とみなされ、母国語の使用や文化の普及などが厳しく制限されました。手紙の受け取りやラジオ電波の受信も禁止された1938年以降は、孤立無援となりました。

そして1945年の戦争終結後、日本人コロニアは、日本が戦争に勝利したと信じる「勝ち組」と敗戦を認める「負け組」に分裂してしまい、両者がいがみ合い、その関係が修復されるまで何年もかかりました。

戦争により、焼け野原となった日本。この事実は日本に帰国するという夢を壊しました。日本人移民はブラジルに永住し、子どもたちがそこで成功を築かなければいけないと強く思うようになりました。ブラジルを「骨を埋めるべき、第二の祖国」として受け入れることは、おそらく、大変な決断だったことでしょう。

その後日本人移民は誇りを持ち、努力と団結、そして労働で一丸となり、再出発しました。これにより、社会的地位を上昇させ、子どもたちを大学へ行かせました。また、各地で協同組合や日本文化協会を設立し、日系ブラジル人の経営する企業や商業も発達していきました。

1954年　グァピアラ日本語学校にて、記念撮影
（角田義夫所蔵）

ブラジル文化との融合

日系二世・三世は少しずつブラジル人と同化していきました。非日系人と結婚し、二世たちはブラジル文化を吸収し始めたのです。新世代の日系人は習慣や顔つきの変化だけにとどまらず、社会的にも変わりました。医者、エンジニア、弁護士、スポーツ界、政界などさまざまな職業や分野で活躍する日系人の姿を見るようになりました。ブラジルでは今もなお、日系人は真面目で責任感が強く、正直者といった評価をされますが、それは文化と子孫を守ろうと努力した先代の移民たちが残した大いなる遺産です。

多くの日系人が住む現在のサンパウロ市街

日本への希望を胸に

1990年、入国管理法が改正され、現在、約30万人の日系ブラジル人が日本で暮らしています。デカセギ・ブームは、かつてブラジルへ移住した人たちの子孫が自らのルーツと向かい合うきっかけとなりました。

ブラジルへ渡った移民と同様、デカセギと呼ばれる人たちはより良い生活を求め、スーツケースに「希望」をいっぱいつめて、日本を目指しました。

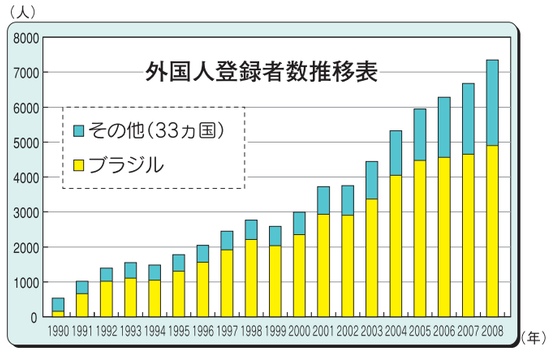
可児市をふるさとに

可児市には、6月1日現在外国人登録者の約7割にあたる4906人のブラジル人が住んでいます。近年では、永住権を取得して住宅を購入し、定住する人も多くなってきました。

数奇な運命をたどって再び日本にやってきた日系ブラジル人の皆さんが、可児市をふるさとに選んでくれました。これからの可児市のまちづくりのパートナーとして皆さんを温かく歓迎しようではありませんか。

（文・参照＝機関紙メイド・イン・ジャパン117号／写真提供＝広島市）

●問合先　まちづくり推進課



日伯交流フェスタinぎふ

アミーゴの輪を広げよう！
新しい未来がここから始まる！

（財）岐阜県国際交流センターは、ブラジル移民100周年記念イベントを7月19・20日の両日に開催します。楽しい催しが盛りだくさん。ぜひこの機会にブラジル文化をご体験ください。

●日　　時　7月19（土）、20日（日）午後1時～
●会　　場　美濃加茂市文化会館（美濃加茂市島町）
★ステージ　サンバSHOW、カポエイラ実演、ボサ・ノーヴァSHOW、フォホーSHOW、きものSHOW、郡上踊り、太鼓SHOW、三味線SHOW、など
★体験コーナー　ブラジルリアン・ダンス、カポエイラ、着物着付け、太鼓、三味線、書道、茶道、陶芸、和紙など
★映画コーナー　「ハルとナツ」
★展　　示　・写真コンクール「ブラジル発見！」入選作品
・ブラジル紹介コーナー
・移民関係資料コーナー
★児童生徒発表　県内ブラジル人学校が出演

●問合先　同センター☎058（277）1013

1928年コーヒー園での収穫作業
（伊藤定寄贈）

1960年アマゾン開拓
建設先発隊入山の際に撮影
（浅野純麗所蔵）